

幼児期に日本語を育むことの大切さ — 幼児教育のチャイルド・アイズで日本語検定を導入 —



株式会社やる気スイッチグループホールディングスは、個別指導塾のスクールIE、幼児教育のチャイルド・アイズ、英会話スクールのウィンビー、バイリンガル学童保育のキッズデュオを全国で展開する総合教育グループです。

幼児教育のチャイルド・アイズでは「幼児期に日本語を育むことは大切なこと」と考え、「文字を書く」「語彙力を発揮する」「気持ちを表現する」「音読をする」を楽しく学び、目に見える成長の確認として、ことば検定、そして、日本語検定を導入しました。

熱心な取組みの成果として、優秀な成績で表彰される生徒も出ています。

今回は、株式会社拓人こども未来チャイルド・アイズ事業本部の四方英子先生、岩崎千恵先生、チャイルド・アイズ上甲子園校の高田泰子先生にお話を伺いました。



(左から岩崎先生、高田先生、四方先生)

■チャイルド・アイズの理念と授業

心と脳を育む幼児教育を行うチャイルド・アイズの理念は、「子どもたちの宝石を見つけて、それを全力でサポートし輝かせること」です。1歳6か月から小学4年生までのお子さんに対し、一人ひとりの生徒の様子を見極め、「今日は、どんな楽しいことがあるのかな？」と生徒自ら学びたい授業を行っています。

■1歳半の子どもから受け入れ

人は生まれたての赤ちゃんのころから言葉のシャワーを浴びています。オギャーと産まれてすぐ、お母さんは「あやす」という方法で言葉がけをします。そのなかで喃語(乳児が発する意味の分からない言葉)が発達していきます。

チャイルド・アイズが受け入れを始める1歳半の子どもには、まだまだ言葉を習得していない子も多くいますが、それでもこの時期に学ぶことには大切な意味があります。例えば子どもの発した「りんご」という言葉に、「赤いりんごだね」と返します。そのようなやり取りを繰り返すなかで「大きいりんご」「小さいりんご」を学び、それが「大きい車」や「タイヤが何個あるね」に繋がっていきます。1歳半のお子さんに、先生は声で働きかけることで、言語獲得のお手伝いをしています。その過程で、子どもが興味を持つことを見つけ、将来、学ぶこと考えることが大好きな子になるようサポートします。

言語の獲得には段階があり、まず「これは何だろう？」と思い、次第にそれが言葉で表現できるようになります。はじめ、犬でも猫でも鶏でも「ワンワン」と言っていたのが「ワンワン＝犬」と分かり、大きい犬、小さい犬が分かり、その種類や犬と猫の違いも分かってくる。そうして「犬とはこんな動物」だと分かるようになるのです。

次ページへ続く >>>

■ 2歳から4歳では

2歳、3歳になってくると今度は文字への興味が出てきます。生活の中で見かける文字が目に入ってくる。ひらがなから入る子もいれば、漢字が先に入る子もいます。

子どもが「山」に興味を持ったら、「どんな山かな？ 高かったね」などと話を広げます。そうすると、子どもは、富士山も砂場の山も、様々な山を想像します。そこから象形文字として「山」を図形的に捉える子が出てきます。

4歳以降の年中になると、書くことに興味を持ち始めます。お手紙ごっこなどを始めるのもこの頃。しかし、未だ文字は見よう見まねで一生懸命書いても、書き順はバラバラ、鏡文字などごちゃまぜです。幼稚園の頃から文字を書く喜びを感じられる環境に置くことは良いことです。ほったらかしにすると文字が正確でなくなり、小学校に入って困るからです。

書きの指導と同時に、正しい言語表現も伝えていきます。ほったらかしだとそれで良いと思ったまま育ててしまいがちですが、「こういう風に言うんだよ」と働きかけることで、子どもたちはどんどん日本語を使えるようになります。

■ 子どもが5歳なら母親も5歳

核家族化が進み、お母さんとお子さんだけで過ごしている家庭が多く、それだけお母さんが子どもに与える影響が大きくなっています。同時に、躰が身に付いていなかったり、お母さんが一人で子育てに悩んでいたりとすることもあっていいます。「子どもが5歳なら、母親も5歳（母親5年目）」なんです。

チャイルド・アイズでは「子育て母親コーチング」を導入し、お母さんが抱えている悩みを相談できる万全な環境を整えています。お母さんの心を育てれば、子どもも健やかに育ちます。相談を通じて親子でともに成長することで、核家族化で起こる母と子の問題を解消できれば、社会貢献にも繋がります。

■ 幼児の言語能力を評価するツールとしての日本語検定

幼児の時にしっかりと他人の言葉を聞き、伝える力を育てることはとても大切です。国語はどの教科を学ぶ上でもその土台になるものであり、幼児期に育んでおかなければ小学校に入ってから吸収能力が低くなってしまいます。国語力、すなわち読み書き、読解力、表現力、書き順などのチャイルド・アイズで大切にしている能力を客観的に評価するツールとして導入したのが、日本語検定でした。

■ 日本人にとって日本語は主言語

日本で育つ子どもたちにとって日本語は無くてはならないものです。正しい日本語を理解し、日本人としての「価値観」や「発想力」を身につけることが必要だからです。

最近、小さい頃から英語を学ばせる方が多くなりましたが、日本語とのトータルバランスを考えることが大切です。日本人にとって日本語は、一生使う主言語です。英語に出会うことも大事ですが、「あか」が赤色と結びつかなかったり、一つずつ「並べる」「重ねる」などの言葉の使い方が分からない子どもが増えていることに危機を感じています。

■ 日本語検定の魅力は

日本語検定の魅力は、出題範囲が多岐に渡っており、現時点での日本語力を総合的に評価できることです。自分の日本語力を客観視する機会を設けることで、誰が見ても恥ずかしくない日本語力を身につけて欲しいと考えています。

チャイルド・アイズの生徒には、日本語検定委員会から成績優秀で表彰された親子もいますが、今回受賞した方は、「力を試したい」という気持ちの強い親子でした。

学年を越えて受けられること、そして親子で一緒に励まし合いながら受検できたことが良い結果に繋がりました。親子で一緒に受検したことは、とても良い思い出にもなったようです。幼児期に言葉の領域を掘り下げる教育は、将来、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力として人生を切り開く強力な武器になります。日本語検定を評価ツールとして活用し、学力を「見える化」し、検証した上で、更なる学びに活かしていきたいと思えます。